

# かまにし

発行 地域力推進蒲田西地区委員会  
編集 地域情報紙編集委員会

第84号

## わがまちの顔



歴史に熱を込めて

さかくち けいか

作家 坂口 螢火さん

多摩川二丁目にお住まいで、作家の坂口螢火(本名、坂口有美子)さんをご紹介します。

坂口さんは、一九八七年、多摩川一丁目生まれ。大田区立矢口小学校を卒業後、川崎の私立中学校・高校を卒業。大学では、東洋考古学と西洋文化史を専攻。卒業後は、横浜の小学校で、教師をされました。

結婚を機に、多摩川二丁目に住んでおられます。現在は、休職中で、作家活動と子育てに専念しています。

ペンネームの螢火は、中国の大奇書から付けたとのこと。おじい様が、時代劇のファンで、一緒にテレビを見ていて、歴史に興味を持つようになり、中学生の頃には、論文を書いて、先生に見せていたそうです。

教師として働くうち、子供達の歴史離れを危惧して、少しでも多くの人に、歴史の楽しさを知って

ほしいと思うようになり、二〇二一年、デビュー作の「忠臣蔵より熱を込めて」を出版しました。作品は忠臣蔵のあらすじをショートショートで綴ったもので、講談調の語り口で書かれています。

「熱を込めて」というタイトルについては、「一生懸命、一心不乱、無我夢中―最近こうしたものを感じないのである。何だか妙にニヒルで、斜に構えていて、『どうせ世の中、こんなもんじゃないか』と諦めている。そんな人間ばかり出てくるのだ。」

忠臣蔵は、江戸時代の、実際にあった事件の物語である。この中に登場する人々は、とにかく熱い。怒ることにも恨むことにも、我が身が燃え上がるほどに熱い。昔の人が持っていた『熱』を現代人がいつの間にか失っているのではないだろうか。生きる喜びや幸福を感じるために、熱は常に持っているのが望ましいと思うのである。」

と、あとがきの中に熱く書いていらっしゃるようです。

二〇二三年一月には、「曾我兄弟より熱を込めて」が出版されます。「熱を込めて」をシリーズ化したと考えているそうです。

義経・山中鹿之介等の構想もありですが夢は、太平記の執筆とおっしゃっていました。

取材場所に、着物で来て下さった坂口さん。普段は、着物で過ごされているとのこと。おばあ様の着物を着ていて、着物好きになられたようです。「夏は着物の方が涼しいですよ。」と着物通ならではの言葉が印象的でした。

これからも、私達に、歴史の大切さ・楽しさを発信してもらいたいです。

(取材 原・山田・高橋委員)



デビュー作  
「忠臣蔵より熱を込めて」

# 郷土史東京

六五年前、郷土史家は何を伝えようとしたのか

昭和三十一年一〇月、大田区馬込で郷土史東京創刊号が発行されました。

## 創刊の辞（創刊号）

最近郷土史研究熱が非常に勢いでおこり、ある地区では学童の熱心な研究に社会科の先生が「これからは郷土の歴史を知らなければ先生はつとまらない」と悲鳴をあげている所さえあると言われ、またある地区では区内の文化人と言われる人たちが年配の町の郷土史研究家の存命中に少しでも多くの記録をとっておきたいと焦っている所もあります。

こうしたとき、わが大東京にはまだ郷土史研究の雑誌がなく、各区及び都下の横の連携がありません。それでそうした指名を果たすために本誌が生まれた次第です。

創刊号（第一巻第一号、定価八〇円、昭和三十一年一〇月一五日発行）の創刊の辞と編集後記です。

## 編集後記（創刊号）

大きな理想をもって出発しましたが、一番苦心したのは読者層をどこへおこかということでした。

区ごとに自分の区内を鋭く研究している人達のみを対象に致しますと、その読者の多くは他の区の人々には興味がなく、そうかといって大新聞の連載読物的に興味本位に致しますと、より深く掘り下げている区または町の研究者にはもの足らず、学童の研究者も無視できません。

こうした悩みをできるだけ解決するつもりで編集したのですが、結果はやや安易に走ったのではないかと心配しております。

（以下略）

## 第二巻第三号以降

創刊の翌年（昭和三十三年三月）に発行された第二巻第三号では、観光バスガイドさん向けに紙上ガイドを始めると宣言されました。

第一回の紙上ガイドは京浜第二国道に沿って馬込、馬込給水所、本門寺、呑川の桜、胴殻様、新田義興の遺蹟が紹介されます。

第二回（第二巻第四号）は中原街道に沿って、平塚橋、調布、丸子橋が紹介されます。

第三回（第二巻第五号）から、旧東海道に沿って、品川、本陣跡、南品川、品川寺、鈴ヶ森、第四回（第二巻第六号）は品川神社、東海寺、海晏寺、磐井神社、平和島、大森、第五回（第二巻第七号）は魚市場、学校裏、梅屋敷、夫婦橋、六郷神社、六郷橋が紹介されます。

第六回（第二巻第八号）は平間街道沿いの大森貝塚、鎧掛の松、荒蘭崎、桃雲寺跡、六人衆、善慶寺、熊野神社に春日神社、あけぼの楼址、本門寺が紹介されます。

第七回以降は他区の紹介になりますので、本紙でご紹介するのはここまでとします。

それでは第一回の紙上ガイドを左ページで写真とその説明により行います。ご覧ください。

（取材 大良委員）

## 編集後記

（第二巻第三号）

俳句の「みずぬるむ」季節となりました。神社仏閣に、郊外にと郷土史探索に出かけるには好適の時節となりましたが、こうしたとき本誌が観光バス会社のガイドの方々の参考になるというので、そうした方面からの申込が思ったより多いので本号から一般欄を利用してガイドの方々のために「紙上ガイド」ともいうべきものを試みることにいたしました。

今回は最初のことでもあり本誌の編集責任者である窪田明治氏にお願いいたしました。次号から各区のエキスパートを動員して書いていただくつもりでおります。

郷土史研究者にとっては一般欄が邪魔になるようですが、郷土史研究はすべての人に開放すべきものですから、こうした欄の育成にご協力お願いいたします。

馬込駅

↑  
五反田

今回は第1  
回の京浜第  
二国道を取  
り上げます



磨墨塚 名馬磨墨がこの地の産であったともこの地で死んだとも伝承されており明治33年に馬込村の人々により碑が立てられました。(南馬込3-18-21)

千束八幡神社に源頼朝が宿営した際に池に映る月のような美しい野生馬が現れ名馬池月となります。本殿横に給馬、境内に像があります。



東急北千束駅は開業当初は池月駅でした

大塚春嶺『宇治川先陣争図』(高松市歴史資料館)手前が佐々木高綱と生食(池月)。奥は梶原景季と磨墨(するすみ)。両名馬が馬込にいたと言われています。

池上本門寺 弘安5年(1282)日蓮が生涯最後の20数日間を過ごした池上家の背後の山が起源。日蓮が没し池上宗仲は法華經の字数(69384字)と同じ69384坪を寄進して池上本門寺と呼ばれるようになりました。多くの文化財を擁し多くの有名人も眠っています。(池上1-1-1)。



池上本門寺

西馬込駅

馬込給水所



馬込給水所 多摩川浄水場、長沢浄水場より水を引き大田・品川区に配水している。南側が第一給水塔で昭和26年完成。北側の第二給水塔は昭和29年完成。高さ28m、直径32m。(西馬込2-15-6)完成時には東洋一の規模でした。

第  
二  
京  
浜  
国  
道

呑川

呑川の桜



新田神社

矢口 1-21-23

どちらも新田義興の遺蹟です。正平13年10月10日に矢口渡で謀殺された義興を祀る新田神社とその従者たちを祀る十寄神社は彼らの無念の思いを現代まで伝えています。



十寄神社

矢口 2-17-28

呑川の桜 右の写真は日蓮橋近くの桜です。日蓮上人入滅日に万山の諸木の花が一時に開いたという伝説にちなんで三間ごとに桜を二千本植えたのが始まりです。



胴殻様

馬頭観音堂内



多  
摩  
川  
↓

明治元年(1868年)西軍が本陣とした本門寺に忍び込んだ彰義隊士の渡辺健蔵は捉えられ霊山橋で首斬され首だけ鈴ヶ森にさらされました。鈴ヶ森刑場跡に建つ大経寺(品川区南大井2-5-6)には勇猛院日健と法号が刻まれた首塚(お首様)があり拝むと首から上の病に効き、胴体は馬頭観音堂(池上3-20-4)に不敵土之墓として葬られ胴殻様(どんがらさま)と呼ばれます。こちらは首から下の病に効くそうです。(左が同柄様で右がお首様)

蒲田西地区はこのあたりです。「全部他の地区なの？」ってがっかりしないでください。すてきな地域に囲まれて幸せじゃないですか!

## ご存知ですか？

### 古民家 鳥海家

大田区には、二十六の国登録有形文化財（建造物）があります。東矢口一丁目に鳥海家住宅主屋があり2002年に登録されました。蓮沼駅近くの閑静な住宅街に立派な構えの家が鳥海家です。

地域に親しまれている建物、時代の特色をよく表している建物、再び造ることが出来ない建物、貴重な文化財です。この国登録有形文化財建造物を守り、地域の資産として活かすための制度「文化財登録制度」が平成八年に誕生しました。

登録有形文化財建造物は、五十年を経過した歴史的建造物のうち、一定の評価を得た建造物を、文化財として登録し、届出制という規制を通して保存が図られ、活用が促されています。



鳥海家の外観



鳥海家の庭

鳥海家は、築八十五年たち、主要部分の増改築はほとんど行われておらず、戦前の部材をふんだんに使用され、当時の建築技法が残っており表現することが容易でない点が評価されています。

庭に面した部屋が客間になっており、この部屋が「ふで書道教室」です。鳥海さんはかまにし17第83号で紹介した光荘会の師範で子供の頃から同会で習っていた。同会は昭和3年、岡田光荘が蒲田で開いたのがはじまり。なお、岡田氏は藍綬褒章を受章された。

書道教室に使われる部屋で、近作書道展にお邪魔する機会に恵まれ、一般公開はされていませんが、室内に入ることが出来ました。

引き戸の玄関を開けると、大きな長方形の上り框の石が置いてあり、たたみ敷の三畳間、その奥には時代を感じさせる襖、襖を開けると、床の間付の十畳間が二部屋横につながっています。鴨居から

天井まで長く、天井が高い作りです。二間続きの十畳間が、近作書道展の会場です。白い紙、墨の黒、古民家での作品展、味わいのある会場になっています。

広くきれいに整えられた庭には、一年中鳥の声が絶えないので、「鳥を観る会などやりたいですね。」と当主の鳥海さんがおっしゃっていました。ご苦労も多いかと思いましたが、今後も、鳥海家の歴史的景観の保存が図られ、益々活用されることを願っています。

（取材 佐藤・北村委員）

## 火災による死者ゼロ 2000日を達成！

矢口消防署では、令和4年8月19日（金）をもって、火災による死者ゼロ2000日を達成し、消防総監から「矢口防火防炎協会」「矢口防火管理協会」「矢口火災予防研究会」に対して感謝状が贈呈され、「矢口消防団」に対しては表彰状の授与が行われました。

これもひとえに、消防団、町会、自治会、協働団体、事業所など地域の皆様の長年に渡る防火防災の取組みの成果であります。改めて感謝を申し上げます。

来年には矢口消防署と矢口消防

団が50周年を迎えます。まずは50周年の節目まで火災による死者ゼロの継続を目指して、今後も地域の皆様と強固な信頼関係を築きあげながら、安全・安心に暮らせる街づくりに貢献していきます。

（矢口消防署）

## 20周年記念号発行のお知らせ

「かまにし17」をお読みいただき、ありがとうございます。かまにし17は、昨年度をもちまして発刊20周年を迎えました。20周年を記念して、記念号の発行を予定しております。平成23年に発行した、10周年記念号以降の記事を掲載しております。出張所で閲覧できますので、楽しみにお待ちください。

## 蒲田西特別出張所管内

|    |          |         |
|----|----------|---------|
| 人口 | 男        | 32,224人 |
|    | 女        | 29,864人 |
|    | 計        | 62,088人 |
| 世帯 | 36,557世帯 |         |

令和4年11月1日現在